

滝宮橋

香川県綾歌郡綾川町

はじめに

橋のある滝宮は菅原道真公ゆかりの地として古くから知られており、また、金毘羅街道の宿場町として栄えていた。近くを流れる綾川は、洪水時には徒歩はもちろん、小舟でさえ渡ることが困難であった。この金毘羅街道に橋が架けられたのは近世のことであり、その変遷は以下のとおりである。

初代は、大里正奥村右衛門が力を尽くして石橋を造営したが、洪水時に崩壊してしまった。二代目は、文化14（1817）年滝宮村の小太郎が大内郡港村の三郎兵衛と図って再び橋を架けたが、文政12（1829）年の洪水で再び流された。三代目は安政4（1857）年に滝宮村の小太郎、小野村の次郎助と茂八郎の3人が相談して、洪水に流されない橋を架けようと、多くの人々の協力を得てようやく完成した。わずか40年の間に二度の洪水に遭い、三度建設を試みた当時の人々の橋への思いと、滝宮という土地が交通の重要地点であったことがこのことから推察できる（図 1）。その後の

洪水には、多くの石を運んで橋の重しとして一度は難を逃れたが、明治10（1877）年10月10日の豪雨により再度流されてしまった。当時の橋は「安益橋」と称して、長さ30間（約55m）、幅3間（約5.5m）であったようである。大正2（1913）年頃の滝宮本町付近の図面によると、旧安益橋の付近に「綾川橋」と見えるので、再度復旧されたようである。

その後、金毘羅街道は物流の流通が盛んになり明治末には乗合馬車が運行されるようになり、大正9（1920）年に県道高松琴平線に認定され、また、道路の直線化や拡幅が図られることにより現在の位置に滝宮橋が建設されたと思われる（写真1）。

滝宮橋は、昭和8（1933）年6月に竣工し、工費は3万7,100円であった。

旧橋（安益橋）の跡には、滝宮小学校新築移転に伴う通学路整備の一環として昭和54（1979）年4月に、長さ45.86m、幅2.0mの歩道橋が工事費約1,900万円で架橋されている。なお、「安益橋」の橋台跡と橋脚用の穴跡は現存している（現在の高橋（歩道橋）直下）。



図 1 安益橋造立縮図



写真 1 滝宮橋竣工写真

橋の構造など

本橋は、上路式鉄筋コンクリート開腹アーチ橋を採用しており、滝宮神社側（右岸）を3径間のアーチ橋とし、左岸側を2径間のコンクリート桁橋（T桁）としている。橋長は91.5mであり、アーチ橋は67.5m（支間長22.5m）、桁橋は24.0m（支間長12.0m）である。意匠にも十分配慮された橋であり、スパンドレルが連続する縦長の小アーチ、アーチリブの断面変化、アーチリブ基部と柱頭部、桁橋の門型橋脚等美しく仕上がっている。また、高欄部にも凸型模様の装飾や灯籠型の親柱もすばらしく、金毘羅街道の宿場町である滝宮を十分意識したものとなっている（図 2、写真 2～4）。

しかしながら、交通量の増加等による時代の流れにより、昭和45（1970）年に橋下流側に鋼鈹桁歩道橋が隣接して架設され、下流側の親柱は撤去され、現在は上流側のみとなっている（写真 5）。

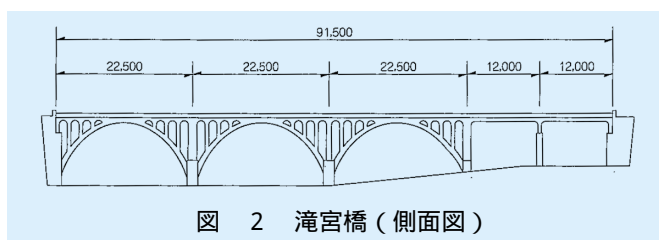


図 2 滝宮橋（側面図）

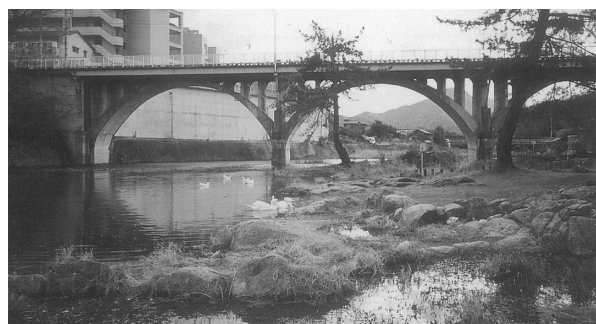


写真 2 滝宮橋（上流より）

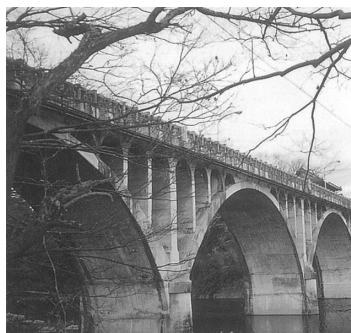


写真 3 滝宮橋（アーチ部等）



写真 4 滝宮橋（親柱）



写真 5（上）滝宮橋（東西）

写真 6（右）滝宮橋（選奨土木遺産認定盾設置箇所）



橋の現在と今後

平成23（2011）年度に土木学会より歴史的土木構造物の保存に資することを目的とした選奨土木遺産に認定（平成23年11月14日に授賞）されている（写真 6）。また、国の重要施策である防災対策、老朽化対策により、東南海・南海地震に備えた耐震化対策工事、橋梁長寿命化計画策定による修繕工事を予定しており、歴史的土木構造物の保存と県民の安全の両立を求められている。

滝宮は滝宮神社はもちろんのこと、香川新50景の一つで桜の名所でもある滝宮公園もあり、また、さぬきうどん発祥の地とされており、金毘羅街道の歴史文化を映し出す「うどん県滝宮」へ足を運んでみてはいかかだろうか。

【交通】 車で：高松市から国道32号で約40分
電車で：琴平電気鉄道 滝宮駅から徒歩5分

【参考文献】

綾川町誌、香川県の近代化遺産
（香川県教育委員会）

【お問い合わせ】

香川県土木道路課 建設・維持グループ
電話（087）832 3533